

すといえよう。

5世紀代の本地方には京都平野沿岸部に入江をはさんで北に小波瀬古墳群、南に稲童古墳群が対峙することとなる。この二勢力は、系譜的には相違すると思えるが、共に甲冑、馬具を中心とする豊富な武人的副葬品にみる如く、5世紀代の朝鮮出兵に活躍した在地首長層であり、その従軍の中で大和朝廷の統制と共に筑紫国造家の影響を強く受け、所謂九州型古墳文化の圏内に入ったものと言えよう。前方後円墳の規模からみて、この関係は小波瀬古墳群の方がより直接的で、石障という本地方では異例な構造を有す壮大な御所山古墳を現出した歴史的背景もここに求められよう。換言すれば、本来朝廷色の濃厚であった本地域が、九州の在地勢力たる筑紫国造家の影響下に次第に組みこまれてゆく姿をみることができる。

小波瀬及び稲童両古墳群はともに6世紀前半代をもって、急激にその内容を失い衰退の途をたどるが、これは磐井の反乱の影響であり、屯倉の設置を通じ、大和朝廷権力の浸透で再び豊前本来の性格にひきもどされてゆくのである。

2. 豊前京都地方の古墳文化

九州の北端、瀬戸内の西端に位置する豊前地方は、その地理的条件によって大陸・半島への通廊として、又、畿内・東瀬戸内文化導入の門戸としての二面性を有す。

畿内大和政権の波及を示す前方後円墳の伝播に於いても、苅田町南原の石塚山古墳にみる如く、九州最古の畿内型古墳の出現地として知られている。石塚山古墳はその出土鏡中の五面に及ぶ同範鏡(註14)から、大分県赤塚、福岡県原口及び御陵古墳との間に分有関係を認め、九州に於ける最古式前方後円墳を有機的に結ぶ中枢をなす。さらに、京都府大塚山古墳・岡山県車塚との分有関係も認められ、畿内大和政権の九州進出の重要拠点としての性格を窺うことができる。

石塚山古墳が象徴する畿内型古墳の波及と相前後して、豊前地方にも近年その類例をまず発生期の古墳（初期古墳）が認められる。行橋市竹並遺跡(註15)の丘陵尾根上には箱式石棺・石蓋土壙・粘土槨（木棺墓）を主体とする方墳及び円墳があり、竹並の東方・周防灘の浜堤上に立地する稲童11号墳がある。稲童11号墳は、内部主体に粘土槨（木棺墓）及び大小二基の石蓋土壙を有し、刀子片と推定される小鉄片の副葬品を検出している。(註17)京都郡北方の北九州市小倉南区長行の郷屋遺跡(註18)も初期の古墳で、円形の同一封土中に2基の大型箱式石棺と2基の箱式石棺を有す。副葬品に後漢末の作と推定される三角縁四禽文鏡、素環頭刀などがある。この古墳の周囲には弥生終末期の箱式石棺及び石蓋土壙墓群を認める。

これらの遺跡は年代的に石塚山古墳出現前にのぼる可能性が強い。豊前京都地方と同様に最古式の畿内型古墳を有す宇佐地方に於いても赤塚古墳出現前に箱式石棺を主体とする方形の古稲荷古墳が存在することが確認されている。(註19)従って、在地性の強い伝統的な箱式石棺・石蓋土

墳・木棺を主体とする初期古墳の造営が先行し、その後所謂畿内型古墳の出現をみるといえる。九州に於ける在地性の強い初期古墳と畿内型古墳との間は、樋口隆康氏が説く如くプロトではなくプレの関係にあり、大和政権の国家統一の過程で、統合の象徴として定型化した畿内型古墳が周防灘沿岸部に波及し、やがて、5世紀代にほぼ九州全域をおさえるといえよう。

畿内型古墳波及後も初期古墳のタイプは存続するが、畿内大和政権の地方支配強化につれて、次第にその主体性と伝統を失いつつ、畿内から波及した古墳の中に埋没する。この様相の一端として、伝統的在地墓制の箱式石棺が堅穴式石室化してゆく展開があげられる。豊前地方に於いては、5世紀代まで箱式石棺を主体とする小円墳が存続している。^(註21)

苅田町には石塚山古墳の他に前方後円墳としては、5世紀後半の御所山古墳、6世紀初頭の番塚古墳がある。石塚山古墳と御所山古墳との間に少なくとも1世紀に及ぶ断絶を認めるが、これは単なる年代的な断絶ばかりでなく、両者間の系譜的（血縁的）相異を示すとも考えられる。宇佐地方の赤塚古墳→免ヶ平古墳→春日山古墳→車坂古墳→鶴見古墳へと同一古墳群中で前方後円墳が展開し、連続する宇佐国造家累代の奥津城をなす赤塚古墳の場合と比べて、内部主体の相異と共に極めて対照的である。赤塚古墳成立の背景として、古稻荷古墳さらに弥生期の東上田・高居・台ノ原・別府遺跡などが駅館川流域の同一平野にある事と、弥生遺跡の稀薄な地域に立地する石塚山古墳とは対照的である。現状では、石塚山古墳成立の背景を沿岸部の苅田の在地勢力に見出し難く、石塚山古墳の被葬者は大和政権が派遣した人物である可能性を秘めているといえよう。

豊前京都地方の古墳文化は朝廷の朝鮮出兵の本格化する5世紀代に入ると質量共に発展し、堅穴系横口式石室や石障など筑肥地区の様相が導入される。

苅田地区の石障を有す御所山古墳^(註12)、堅穴系横口式石室の番塚古墳^(註4)の他、行橋市稲童地区の帆立貝式の石並古墳^(註11)（稲童20号墳）、勝山地区の扇八幡古墳などの前方後円墳があらわれる。これらの前方後円墳はそれぞれの地区の古墳群の主墳を構成している。また、この時期に甲冑などの多量の鉄製武器をもつ円墳の出現がめだつ。挂甲小札、素環頭太刀、鉄鏃、馬具など副葬のビワノクマ古墳^(註1)、堅矧板式短甲、鉄剣などを副葬の稲童15号墳^(註8)、三角板鋌留短甲、横矧板鋌留短甲、眉底式冑、刀剣、馬具など副葬の稲童21号墳^(註2)、横矧板式短甲、衝角付冑、鉄鉾、馬具など副葬の稲童8号墳^(註9)、横矧板鋌留短甲、刀などを副葬する犀川町長迫古墳^(註6)などがあり、今回報告する猪熊1号墳も横矧板鋌留短甲、衝角付冑を有しこれらの古墳と類似する性格を有している。筑紫国造と共に朝鮮経営に活躍した在地首長層の姿を彷彿させる。

6世紀に入ると各地に小円墳の群集する古墳群の成立をみるのが注目される。苅田町では松山古墳群、松陰古墳群、黒添古墳群があり、行橋市竹並遺跡では横穴だけで2,000基を越えるという正しく爆発的な数値を示す。また勝山町の黒田地区では莫大な後期古墳群に混じって、寺田川・庄屋塚・箕田丸山の前方後円墳があり、綾塚、橘塚の巨石墳が存在し、6世紀代

の豊前京都地方で最も充実した姿を示している。この黒田地区の発展に比して、5世紀代の豊前京都地方に於ける中心勢力たる小波瀬古墳群（与原地区）及び行橋市稲童古墳群の衰退が目立つ。すなわち、与原地区では番塚古墳の造営をもって前方後円墳が消滅し、稲童古墳群では墳丘及び石室構造の縮小が顕著で普遍的な小円墳群へと変質する。この背景として磐井の反乱の持つ意義は大きく、新たな大和朝廷の統制が想定される。

磐井の乱後、安閑天皇二年（535）に設置された屯倉の内、九州では筑紫国の穂波・鎌の二屯倉、豊国の膝碕、桑原、肝等、大拔、我鹿の五屯倉、火国の春日部屯倉があり、屯倉の設置を通じて大和朝廷の北九州に対する官司制的な支配体制がおしすすめられる。中でも、膝碕（北九州市門司区？）、大拔（北九州市小倉南区貫）、肝等（苅田）の如く、豊前の周防灘沿岸部に南北に連続して集中していることは、筑後国風土記にみえる磐井が豊前国上膳県（築上郡）にのがれたという記録と合わせて極めて興味深い特色である。

九州の国造がある程度の自立性を残して、君（公）姓を一般とする中で唯一の直姓を有す豊国造は「九州ではむしろ特殊な国造であった」とする性格は、安閑天皇代の屯倉設置によって一段と強化されたものと思える。^(註23) 豊前京都地方に対する強力な大和政権の浸透・統制は、石塚山古墳が象徴する4世紀にその第一波があり、磐井の乱後の屯倉設置がその第二波といえよう。第二波の規制は、半島出兵という政治的背景を契機に大和朝廷から次第に自立化し筑紫国造との連携を深めた豊前に対し、九州統治における豊前本来の機能に引き戻すためであったといえよう。（1976. 8. 31 稿了）

※ お わ り に

本稿を草するに当たり、小田富士雄氏から未発表の浜町遺跡出土土師器実測図の提供を受けた。記して感謝申し上げる次第である。

なお、発掘中に同僚の梶原弁二氏及び遺物写真撮影に際して、曾塚孝氏の協力を得た。併せて感謝申し上げる次第である。

第3章 脚注

- 註1 鏡山猛「福岡県行橋市琵琶隈古墳」考古学年報8 1955。
- 註2 大川清編「福岡県行橋市稲童古墳群第2次調査抄報」1965。
- 註3 山中英彦「今村清川町古墳」（北九州市の埋蔵文化財）北九州市文化財調査報告書16 1976所収。
- 註4 渡辺正気「番塚」苅田町 1960。
- 註5 渡辺正気「佐賀市関行丸古墳」佐賀県文化財調査報告7 1958。
- 註6 小田富士雄・石松好雄「九州古墳発見甲冑地名表補訂」九州考古学24 1965。
- 註7 村井富雄「衝角付冑の系譜」東京国立博物館研究紀要9 1974。
- 註8 小田富士雄「福岡県行橋市海岸の弥生式墳墓」九州考古学11・12 1961。
- 註9 大川清編「福岡県行橋市稲童古墳群第1次調査抄報」1964。
- 註10 定村貴二「箕田中原古墳調査報告」美夜古文化19 1969。
- 註11 小田富士雄「福岡県行橋市石並前方後円墳」美夜古文化18 1967。
- 註12 石山勲「史跡御所山古墳保存管理計画策定報告書」苅田町教育委員会 1976。及び同書所収 坪井正五郎「豊前京都郡与原村の古墳」。
- 註13 松尾禎作「目達原古墳群発掘調査報告」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告9 1950。
- 註14 小林行雄「古墳時代の研究」1961。
- 註15 西谷正、下条信行、佐田茂、木村幾太郎、島津義昭「九州考古学の諸問題」同書所収 1975。
- 註16 赤崎敏男「竹並遺跡—福岡県行橋市竹並所在遺跡の調査概報(1)—」1974。
佐田茂、赤崎敏男、村上久和、長嶺正秀「豊前・竹並遺跡の調査」九州考古学51 1976。
- 註17 昭和40年の早稲田大学による同古墳群第3次調査。
- 註18 山中英彦「郷屋遺跡」—北九州市の埋蔵文化財—北九州市文化財報告16 1976所収。
- 註19 小田富士雄、真野和夫、小倉正五「豊前・宇佐地方における古式古墳の調査」考古学雑誌60—2 1974。
- 註20 樋口隆康「九州古墳墓の性格」史林38—3 1955。
- 註21 山中英彦「東宮ノ尾古墳群」北九州市文化財調査報告14 1974。
- 註22 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」史淵100 1968。
- 註23 井上辰雄「筑・豊・肥の豪族と大和朝廷」古代の日本3九州 1970。